

和白干潟を守る会

2022年度活動報告

和白干潟を守る会事務局

2022年度のまとめ

和白干潟を守る会の環境保全活動は、34年を過ぎました。大切な和白干潟の自然を未来の子どもたちに残すために、これからも環境保全活動を続けていきます。2022年度も世界中で新型コロナウイルス感染症が流行しました。日本でも新型コロナウイルス感染症の感染拡大がありましたが、感染状況が落ち着いている11月に、4年ぶりに和白干潟まつりを実施することができ、大変嬉しいことでした。5月のガイド講習会も無事に開催できました。感染対策をとりながら鳥類調査とクリーン作戦を続けることができました。夏の猛暑が長く続き海水温が高く、アオサの発生がとても少なかったおかげできれいな干潟が保て、アサリも増えて、シギやチドリたちも多く飛来しました。守る会の新しい会員も増え、コロナ禍でしたがいいことも色々ありました。

2021年11月に鹿児島県の「出水ツルの越冬地」がラムサール条約に登録されました。2022年11月には1年延期された第14回ラムサール条約締約国会議（COP14）が武漢（中国）とジュネーブ（スイス）で開催されましたが、新たに登録された日本の湿地はありませんでした。ラムサール条約に登録されるためには、国指定鳥獣保護区の「特別保護地区」に指定されなければなりません。和白干潟はまだ国指定鳥獣保護区の普通地区のままです。今後も和白干潟がラムサール条約に登録されるように活動を続けていきたいと思います。

守る会が呼びかけた「山・川・海の流域会議」の活動では、立花山・唐原川・和白干潟の保全グループが連携して保全活動を続けています。2022年1月に新春講演会「和白干潟の海底湧水」を行いました。守る会でも5月の自然観察ガイド講習会で「海底湧水」を取り上げました。

活動への企業や学校の支援が増え、「クリーン作戦」への参加者が増加傾向です。九州産業大学は特別講義を企画され、多彩に協力いただきました。2022年度は新型コロナウイルス感染症の流行で活動が制限された中で、よく活動を続けることができたと思います。今冬は、ミヤコドリは23羽が和白干潟に来ており、クロツラヘラサギも18羽を確認しています。ツクシガモは118羽を確認しました。今冬はハマシギやミユビシギやシロチドリなどの小型シギ・チドリ類の群れが多く見られます。和白干潟がもっともっと回復して欲しいと願っています。

2023年度も和白干潟を守る活動に、皆さまのご協力をお願いします。和白干潟がぜひ「ラムサール条約登録湿地」となるように希望を持ってがんばりましょう！自然豊かな和白干潟を、みんなの力で未来の人たちに渡したいと思います。引き続き若い人たちの活動への参加を心から待っています！

和白干潟を守る会 代表 山本廣子

活動方針に基づく報告とまとめ

1. 和白干潟環境教育プログラムによる「自然観察会」、「クリーン作戦と自然観察」「和白干潟まつり」「学習会などの企画」を通して、多くの市民、特に若い世代や子どもたちに和白干潟の自然の大切さを認識してもらい、自然保護の気運を高める。

1. 和白干潟観察会

2022年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、観察会は大きく減った。1月に観察会案内状の送付を行い、観察会グループミーティングは、12月に行った。観察会の依頼を受けると、事前に下見・打合せを行い、観察会に来る学校等でパンフレットやビデオを使った事前学習をしてもらった後、観察会を実施した。

2022年度中（1月～12月）の和白干潟自然観察会は、年間8回で、延べ408名の参加があった。学校関係からの依頼では、小学校2回（和白小学校）225名、高校1回（柏陵高校）46名、

合計3回、271名であった。コロナ禍の影響で例年行われる和白小学校の2月末のまとめの発表会は中止となった。香椎保育所の観察会が久しぶりに実施できた。毎年7月に開催している「和白干潟の生きものやハマボウを見る会」は、新型コロナウイルス感染症が収まっていたため実施することができ、51名の参加があった。ガイドの固定化と高齢化の課題に対しては、新規会員の方がガイド見習いとして参加するなど改善の兆しがみえた。ガイド見習い研修については、今後も継続して行く。

年度	団体区分	実施回数	延べ人員
2022	保育園	1	54
	小学校	2	225
	中学校	0	0
	高校	1	46
	大学	1	5
	一般	3	78
	合計	8	408

2. 和白干潟の自然観察ガイド講習会

和白干潟の自然の特性を良く理解して観察会の案内が出来るように、5月1日に第24期「和白干潟の自然観察ガイド講習会」（和白干潟の海底湧水を調べよう）を行い、19名の参加があった。

3. 和白干潟のクリーン作戦と自然観察（毎月第4土曜日）

毎月第4土曜日午後3時から5時まで（但し、真夏と真冬は時間短縮した）海の広場から唐原川河口、和白4丁目の範囲をその時の状況に合わせて清掃し、同時に自然観察、水質や砂質調査を実施した。

定例のクリーン作戦は、年間12回、1月～12月まで休むことなく実行できた。定例のクリーン作戦の他に、自然観察会のチームエナセーブダンロップグループのクリーン作戦では砂に埋もれたチャイルドシートやタイヤを回収した。今年はアオサが発生してなく

て例年よりもクリーン作戦は草木や人工ゴミが主で楽に回収出来た。コロナ禍で観察会などの中止や変更でゴミの回収も少なかったが、この内定例のクリーン作戦では守る会人数は延べ161名だった。全体では延べ473名の参加があった。その他では延242名、守る会の22名の参加があった。ゴミについてその内訳は、人工ゴミ：196袋、草木：338袋、アオサとボウアオノリ158袋（内ボウアオノリ29袋）可燃ごみ：692袋：不燃ごみ：35袋で、合計で727袋だった。粗大ゴミでは、今年もタイヤ、浮き、寝具、電化製品、流木など、様々な物があった。定例のクリーン作戦では、企業や城東高校、九州産業大学生

年度	活動項目	回数	延べ人数 (人)	ゴミの量 (袋)
2021	クリーン作戦	11	478	959
	その他	1	127	5
	合計	12	605	964
2022	クリーン作戦	12	473	700
	その他	3	264	27
	合計	15	737	727
増加割合(%)		125.0%	121.8%	75.4%

などの参加があった。アオサはほとんどが昨年の取り残し分で4月頃までであった。

- ・4月23日(土)のクリーン作戦は「干潟を守る日」と「春のビーチクリーンアップ」参加
- ・6月25日(土)のクリーン作戦はラブアースクリーンアップ参加で実施した。
- ・9月24日(土)のクリーン作戦は「国際ビーチクリーンアップ」に参加し、ゴミデータ調査を実施。ゴミ調査には九州産業大学宗像ゼミの学生や企業からの協力があった。ゴミでは依然プラスチック類のゴミが多かった。

4. 第34回和白干潟まつり

4年ぶりに、第34回和白干潟まつりを11月20日に開催することが出来た。8月の第1回実行委員会でコロナ禍が収まっていなくても万全の予防対策を整え、観察会主体のまつりを開催すると決めた。バザー出店者には、会場での飲食販売はしないと通知し、15団体から飲食以外の出店・出展の申し込みがあった。

11月20日、第34回和白干潟まつり当日は、お天気に恵まれ暑い位の日差しの中、約400名の参加があった。11時からの開会式では、今年度からラムサール宣言を閉会式から開会式に変更したことで、多くの参加者にラムサール登録の意義が伝わった。野鳥観察は、約60名の参加で53種の鳥を観察した。沿岸やアシ原、干潟での自然あそび(16名)、植物観察(14名)、干潟の生きもの観察(31名)は例年より多くの参加があり、特に大人に好評だった。マリンワールド海の中道からは「博多湾の生きもの水槽」2台を設置していただき大好評だった。脱原発、博多湾人工島問題等展示、ワークショップ、施設事業所物品委託販売など飲食販売が無い分、各出店者が工夫して展示・販売していた。ステージ企画は、和白干潟や海をテーマにした演目で、コーラス、紙芝居、エプロンシアター、マジック等少数精鋭で好評だった。前日の草刈り、広場準備から当日の片付けまで全員で協力して楽しいまつりにすることが出来た。反省会も出店者アンケートを渡して15分で終了した。アンケートでは、手作りの素敵なおまつりだったと評価していただいたが、運営側の高齢化も指摘された。要望の10時開催は今後の検討課題とした。干潟まつりの今後に向けて、継続は「力」なり、永く続けて後継者の育成を課題としたい。和白干潟まつりの経費は、協賛金、守る会売り上げ、カンパで賄われているが、収入74128円に対し経費は82751円かかった。8623円の赤字決済となった。

5. 和白干潟に関する学びの機会をつくる

5月1日(日)、第24期和白干潟の自然観察会ガイド講習会が実施された。今回は、新井講師による「和白干潟の海底湧水を調べよう」という題目で行われ、19名(一般:2名、守る会:17名)の参加があった。事務所で新井講師が行っている活動が紹介され、その後、和白干潟にて海底湧水の採水を行った。採水量は少なかったが、実際に舐めてみることで海水とは違う味を感じ、貴重な体験を得る事が出来た。海底湧水が生態系に影響を及ぼし、またその事が和白干潟の環境修復に関連している事を学ぶ良い機会となった。

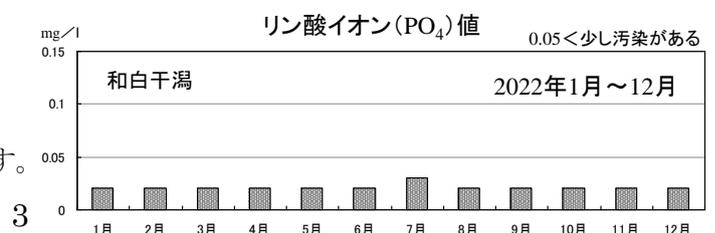
2. 和白干潟の大切さと保全の必要性を広く社会に訴えるため、和白干潟を取り巻く自然環境の変化について、干潟及びその周辺の生物の調査、漂着ゴミ調査などの活動を継続し、調査結果を公表する。

6. 調査

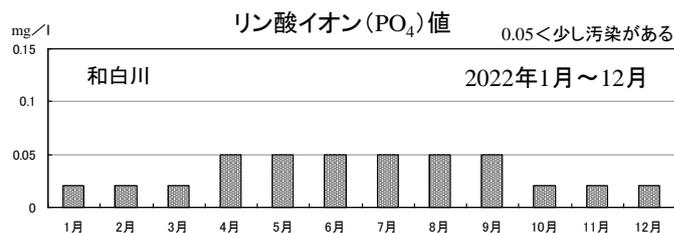
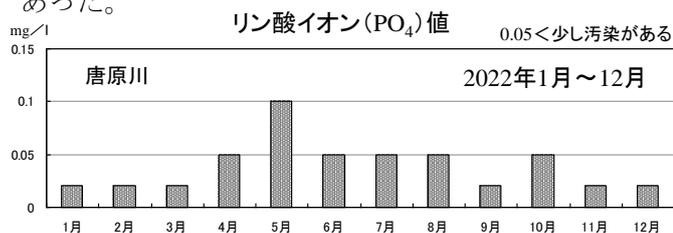
調査項目としては毎月実施する水質調査及び砂質調査、9月の国際ビーチクリーンアップ参加でのゴミ内容調査のほか、水鳥調査などを実施した。水質に関しては唐原川と和白川を調査地点に加えて観測を行っている。

(1) 水質調査(毎月1回実施)

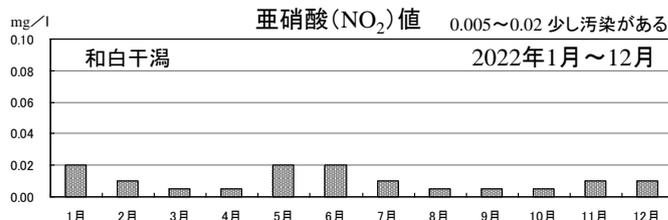
①リン酸イオン値(PO₄)は海水中のリンの状態を示すもので0.05以下は「きれいな水」であること、0.05~0.2は「少し汚染がある」状態であることを示す。



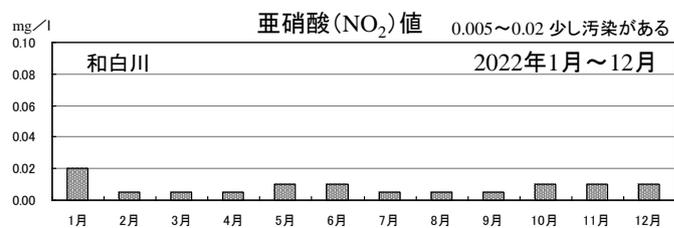
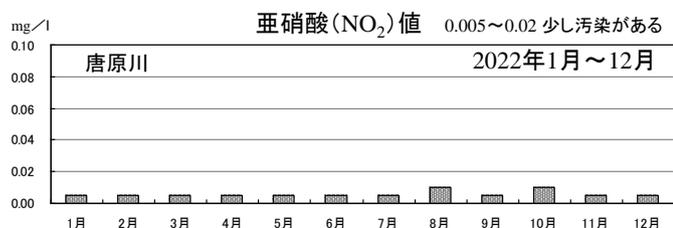
- ・和自干潟では、年間を通して 0.05 以下であり、「きれいな水」の状態であった。
- ・唐原川は 0.2 以下であり「少し汚染がある状態」であり、和自川は 0.05 以下であり「きれいな水」の状態であった。



②亜硝酸値 (NO₂) は海水の窒素の状態を示すもので、0.005 以下は「きれいな水」、0.005~0.02 は「少し汚染がある」、0.02~0.05 は「汚染がある」状態を示す。

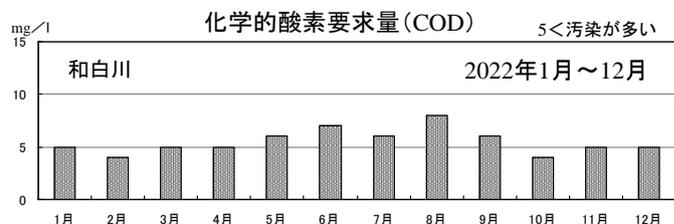
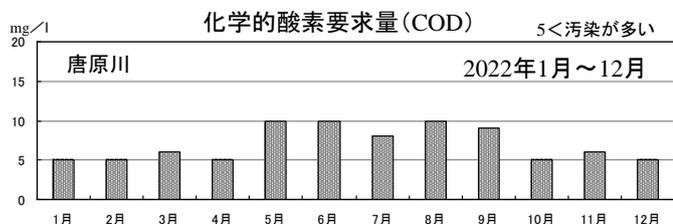
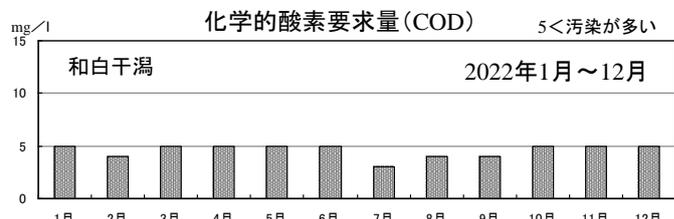


- ・和自干潟では年間を通して 0.02 以下であり水質は「少し汚染がある」状態であった。
- ・唐原川、和自川は、年間を通して「0.005~0.02」であり、「少し汚染がある」状態であった。

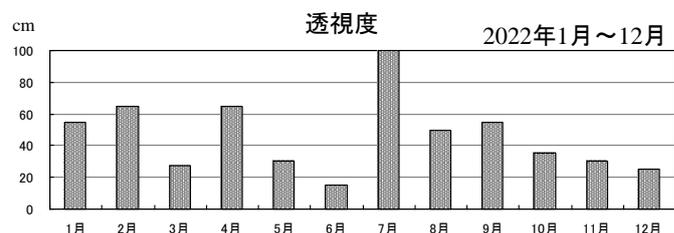


③化学的酸素要求量 (COD) は水の汚れ具合を示すもので、2 以下は「きれいな水」、2~5 は「汚染がある」状態、5~10 を「汚染が多い」としている。

- ・和自干潟では年間を通して 5 以下であり、5 を下回る月が 4 回あり、「汚染がある」状態であるが、水質は改善傾向にある。
- ・唐原川や和自川では年に何度か 5 を越えることがあり、和自干潟に比べると汚れが多い。和自川と唐原川を比べると唐原川の方が汚れが多い。



④透視度については、以前は通常 30 cm 位であったが 2015 年度からは透視度計の 100 cm まで見えることがあり、透視度は改善傾向にあった。しかし、2022 年度は平均で約 40 cm であり、前年よりは悪化した。

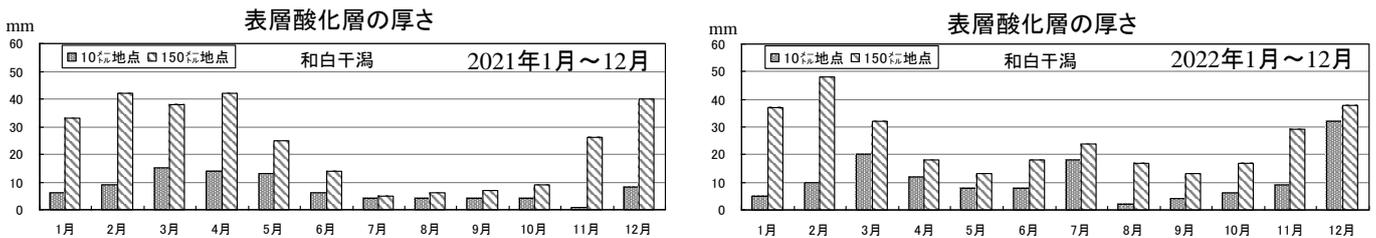


(2) ゴミ内容調査

9月の国際ビーチクリーンアップにて、干潟に漂着したゴミを回収して内容調査を実施した結果、35種類のゴミが回収された。収集したゴミの中で、特に多かったのは、今、社会で問題となっているプラスチック類の「食品の包装・袋」で、その次に多かったのは「ペットボトル」だった。調査には九産大宗像ゼミや明治・安田生命の方々の協力があった。調査データは干潟通信やホームページで公表していく。

(3) 砂質調査

和白干潟・海の広場前 10^{メートル}地点と 150^{メートル}沖合地点の表層酸化層の厚さと還元層の黒色度を測るものである。表層酸化層が厚いほど干潟が健康な状態にあることを示す。



上のグラフは、2021年度と2022年度の表層酸化層測定結果である。沖合いの方が厚い傾向にあるが両年度とも浜辺側の表層酸化層の厚さが薄く、2022年度は、2021年度に比べて少し改善している。

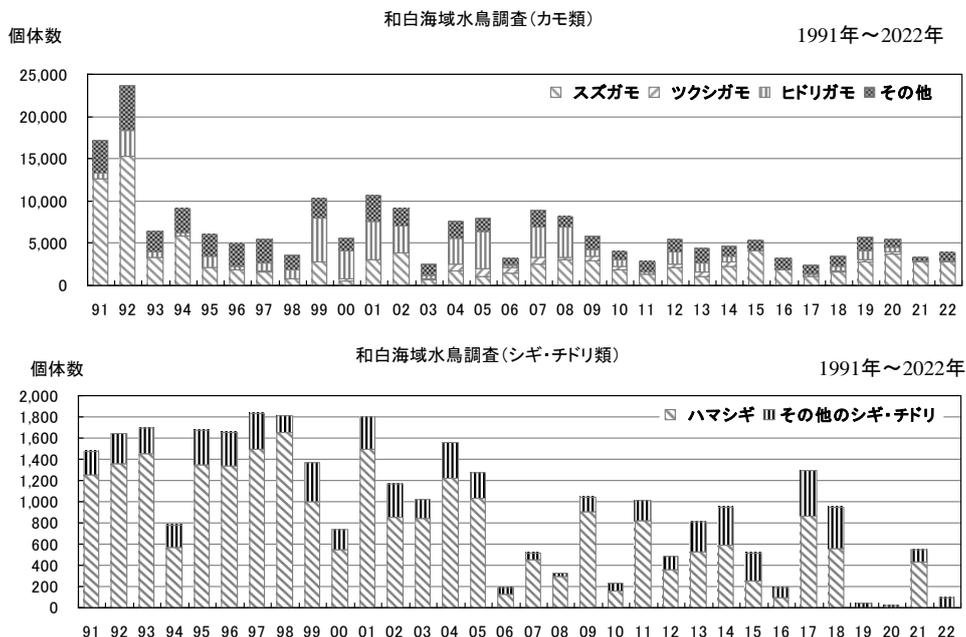
(4) 鳥類調査

2022年度は新型コロナウイルス感染防止のために、調査員は集合せずに各調査ポイントに分かれて調査した。調査記録を写真とともに送ってもらい集計した。

鳥類調査では以下の調査に協力した。

① 1月 和白海域水鳥調査（日本野鳥の会福岡支部）2022年1月17日に実施。

和白海域の水鳥の越冬数（和白海域水鳥調査）の内、カモ類は前年の 3,633 羽より少し増えて 3,738 羽、最多の 1992 年の 23,719 羽と比べて約 6 分の 1 だった。シギ・チドリ類は前年の 558 羽より減少し 100 羽。ハマシギやミユビシギがほとんど見られなかった。90年代の約 1,600 羽と比べて約 16 分の 1 に減少した。調査参加者は 6 名だった。



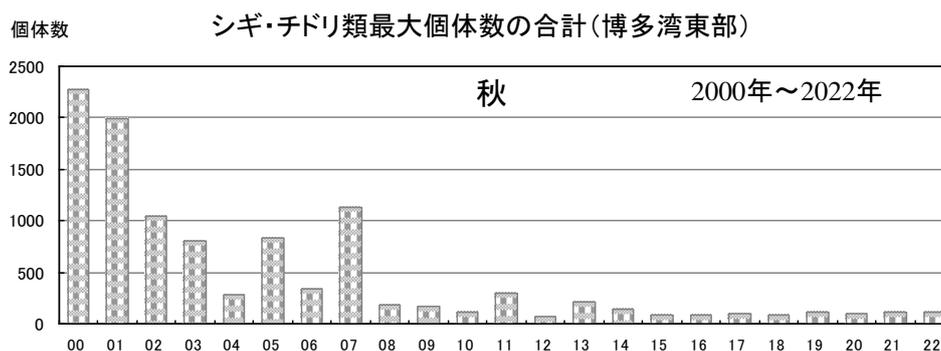
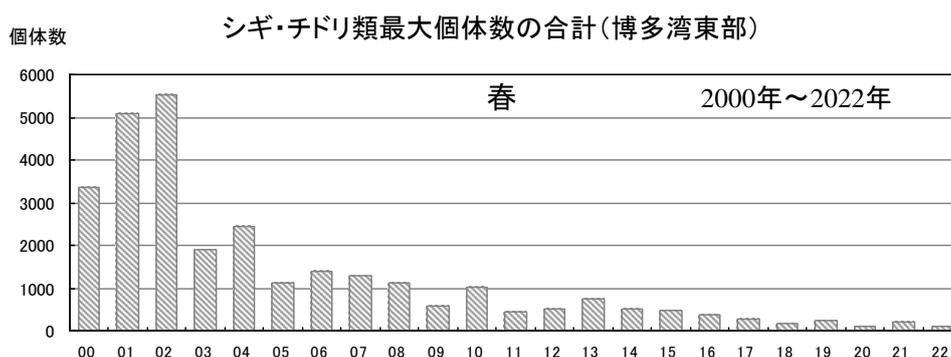
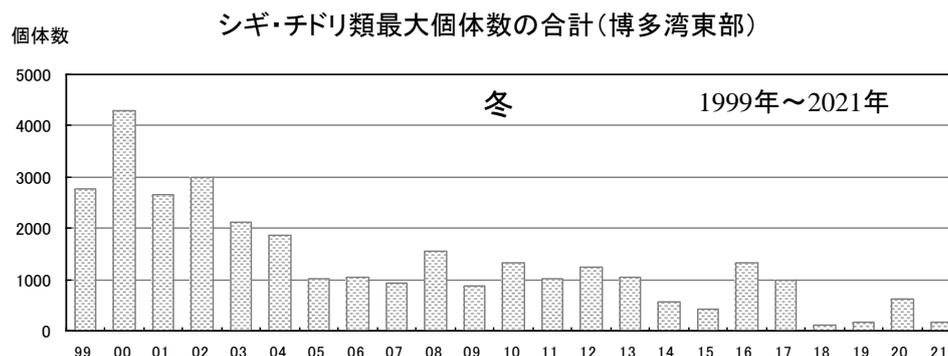
② 環境省モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ調査（環境省・NPO 法人バードリサーチ）

冬期：2021 年 12 月、2022 年 1～2 月 今津と博多湾東部で各 3 回実施

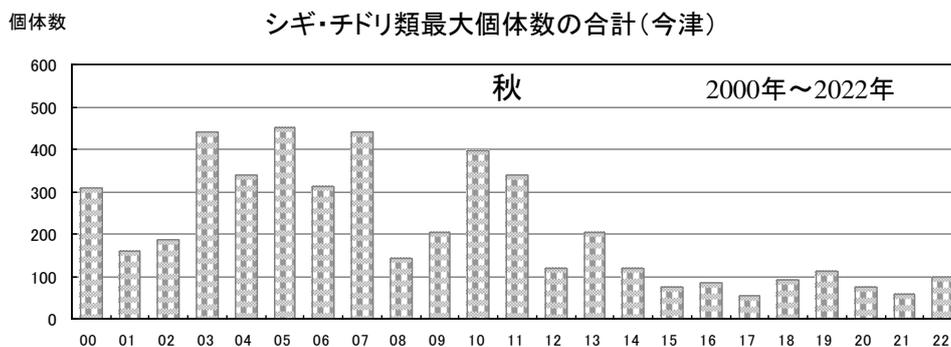
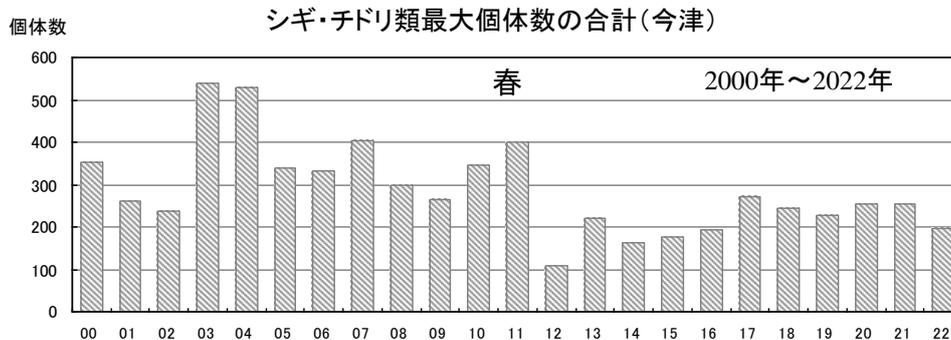
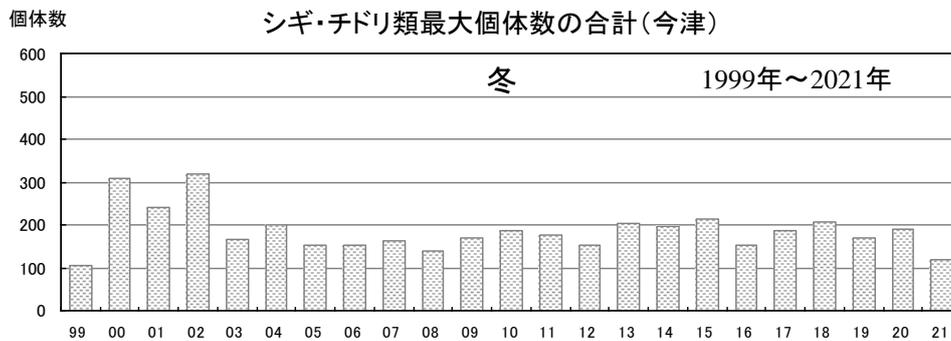
春期：2022 年 4 月～5 月 今津と博多湾東部で各 3 回実施

秋期：2022 年 8 月～9 月 今津と博多湾東部で各 3 回実施

博多湾東部海域のシギ・チドリ類最大数合計は、2021 年度冬期は 2000 年の 4,300 羽から **165 羽**に減少し（昨年 611 羽）、2022 年春期は 2002 年の 5,509 羽から **120 羽**に減少（昨年 216 羽）。2022 年秋期は 2000 年の 2,271 羽から **119 羽**に減少した（昨年 118 羽）。希少種では、冬期と春期にクロツラヘラサギは最大 **26 羽**（昨年 19 羽）、ヘラサギは最大 **3 羽**（昨年 4 羽）、ツクシガモ **255 羽**（昨年 190 羽）、ズグロカモメ 2 羽（昨年 0 羽）を確認した。



今津のシギ・チドリ類最大数合計は、2021 年度冬期は 2002 年の 319 羽から **118 羽**に減少し（昨年 190 羽）、2022 年春期は 2003 年の 538 羽から **195 羽**に減少（昨年 253 羽）、2022 年秋期は 2005 年の 450 羽から **100 羽**へ減少（昨年 58 羽）。希少種では、冬期と春期にクロツラヘラサギは最大 **14 羽**（昨年 15 羽）、ヘラサギは最大 **7 羽**（昨年 7 羽）、ツクシガモ **75 羽**（昨年 125 羽）、ズグロカモメ **6 羽**（昨年 11 羽）を確認した。



(※博多湾東部と今津のグラフの個体数については単位が違うことに注意！)

この 20 年ほどで博多湾東部の鳥類は大きく減少した。2016 年と 2017 年冬期のシギ・チドリの個体数が少し増加したが、2018 年春期以降はまた減少し、2020 年冬期はまた少し回復した。今津のシギ・チドリは減少状態であるが博多湾東部に比べて減少が少ない。博多湾東部に比べて今津は開発の影響が少ないと思われる。

2022 年の鳥類調査参加者は、毎回 7 名から 9 名、延べ 79 名が参加。また一斉調査以外にも個人で調査を行った。鳥類調査担当者が高齢化し、調査員が不足している。車の運転者も不足している。調査協力者を求めている。

※ミヤコドリは 2022 年 8/30 に 2 羽初認、9/1 に 3 羽、10/7 に 10 羽、10/30 に 18 羽、11/1 に 23 羽、を観察し、越冬している。(昨年度最大数記録 22 羽) クロツラヘラサギは 2022 年 9/20 に 1 羽初認、10/7 に 10 羽観察、10/21 に 12 羽観察、11/4 に 16 羽観察、11/7 に 18 羽観察 (+ヘラサギ 2 羽)。(昨年度最大数記録 18 羽) その後も越冬している。ツクシガモは 11/1 に 3 羽 (初認)、12/6 に 70 羽観察、12/17 に 80 羽観察、12/20 に (118 羽) 観察。以降も越冬している。(昨年度最大数記録 255 羽)

3. 貴重な鳥類をはじめとする生物多様性に富む和白干潟を「ラムサール条約登録地」とするための取り組みを強化する。博多湾の自然を壊す人工島などの公共事業には厳しい監視と関心を持って対処する。今ある自然を壊さないこと、壊れた自然は元の自然に戻すことを目指す。

和白干潟の生態系を守るために、山・川・海の流域連携に取り組み、地域の自然再生への取り組みを進める。和白干潟を守る会の活動をより広く知ってもらい、活動への参加者、賛同者を増やすために広報活動を強化する。

7. ラムサール条約登録をめざし、行政、議会、市民に向けた活動に取り組む

4年ぶりの開催となった第34回和白干潟まつりで、ラムサール宣言を表明する事が出来た。後日、環境大臣、環境省九州事務所と福岡事務所、福岡県知事、福岡市長に「第34回和白干潟まつり ラムサール宣言」を送付した。なお、和白干潟まつりには毎回市長からのメッセージは届くが、干潟保全活動への謝意に留まり、ラムサール条約登録への方向性は今回もうかがえなかった。

8. 福岡県・福岡市等の環境政策、公共事業に対し、情報収集、学習、意見交換、提言に努める

(1) 福岡県・福岡市等の政策についての取り組み

① 福岡市長選挙立候補予定者へ公開アンケートを送付し、結果をホームページに掲載した。

(2) 福岡市との連携

① 「和白干潟保全のつどい」の定期開催

福岡市港湾空港局環境対策課や自然保護団体などと連携し、「和白干潟保全のつどい」を毎月1回定期的に開催している。本年度は、7月に「和白干潟の生きものやハマボウを見る会」、9・10・11月に「アオサのお掃除大作戦」、12月に「バードウォッチング in 和白干潟 2022」が予定通り開催された。

② 「ラブアースクリーンアップ」

ラブアースクリーンアップ 2022 は、6月25日にクリーン作戦と併せて実施し、40名の参加があった。

9. 「山・川・海の流域会議」の他団体との流域連携について

1月の新春講演会は「和白干潟の海底湧水」と題して、新井章吾氏に講演していただいた。その後、各グループ・サークル（楽友会・立花山グリーンガイドの会・唐原川を考える会・和白干潟を守る会）の活動報告が行われた。「山・川・海の流域会議」は定期的に開催されたが、「立花山を歩こう」の企画は、雨天のため中止となった。10月の「唐原川お掃除し隊」は予定通り実施する事が出来た。

10. スタッフの確保、活動への参加の強化について

ボランティアの募集に力を入れ、気軽にボランティアに参加できるようにHP、通信、あすみんHPなどで情報提供している。その成果もあり、コロナ禍においてもクリーン作戦の参加者は増えている。会員数については、新規会員も増えたが、結果的に個人会員は前年度と同じになった。団体会員数は2団体減少した。

11. 広報の強化について

(1) 和白干潟通信・ホームページ・リーフレット類

① 干潟通信

和白干潟通信は1、4、7、10月にそれぞれ140、141、142、143号を5000部ずつ発送する事が出来た。発送時にはコロナ感染対策として、手配り時にはマスクの着用、手指の消毒を徹底した。干潟通信は（公財）イオン環境財団の助成金を受けて、ロータリー印刷（株）で作成した。配布先は、会員、マスコミ、

行政関係、和白干潟付近の家庭、クリーン作戦や自然観察会参加者、ホテル、郵便局等。

- ② ホームページは、4名が分担し編集している。
- ③ 「クリーン作戦と自然観察のお知らせポスター」は、東区役所、公民館、郵便局、周辺大学（福工大、九産大、福岡女子大、令和健康科学大学）、銀行、駅、老人福祉センター（東香園）、などにも掲示依頼している。
- ④ 守る会リーフレット 5000 部、守る会封筒 10000 部の納品があった。

(2) その他

① イオン「幸せの黄色いレシートキャンペーン」への参加

イオン香椎浜店で、毎月 11 日にボランティア団体支援のイエローレシート投函を呼びかけるキャンペーンに参加し、15 年目となった。レシートの買い上げ金額の 1%相当額が団体に寄付され、4 月には 1 年間のギフトカード (47,300 円) の寄贈があった。但し、新型コロナ感染予防のため、一昨年 4 月からキャンペーンは実施するが店頭活動が中止となり、今年に入ってもその形態は変わらなかった。守る会の通信やイベントのチラシを手渡しして守る会の活動への賛同を呼びかけることが出来ない状況となっている。

1 2. 講演活動

山本代表が講演活動を行った。

11 月 九州産業大学特別講義「和白干潟の自然や地球の自然を守りましょう！」

1 3. 情報の発信：新聞や雑誌、他団体の会報等に鳥情報、和白干潟の紹介を発信

- ・環境局の「わくわく出前授業」の「和白干潟の自然観察会」について回答を送付
- ・日本消費者連盟の月間機関紙「消費者レポート」の依頼で、和白干潟を守る会の活動紹介の文と写真を送付
- ・「2022 干潟・湿地を守る日」参加のクリーン作戦と自然観察会報告と写真を「JAWAN 通信」に送付
- ・くすだひろこきりえ展「和白干潟散歩」レストラン「花もも」にて (5/2~5/31) 開催し、和白干潟のパンフレットや通信を配布
- ・「容器梱包の 3R を進める全国ネットワークニュース」1 月号に「和白干潟からの報告」を書いて送付
- ・あすみんからのアンケートに書き込み送付。

1 4. 取材協力：新聞社、テレビ局、雑誌などからの取材に協力

- ・ミヤコドリ、クロツラヘラサギ、ツクシガモの飛来について各新聞社に情報提供した。
 - 9/13 西日本新聞にミヤコドリが掲載された。
 - 10/24 FBSTV「めんたいワイド」でクロツラヘラサギが放映された。
 - 10/25 NHKTV「ろくいち」でクロツラヘラサギが放映された。
 - 12/16 西日本新聞にツクシガモが掲載された。
- ・12/14 九州の生協の雑誌、「クリム」から取材を受けた。

1 5. 対外団体との交流活動、協力・参加活動

(1) 日本野鳥の会福岡支部

毎月 1 回「和白海岸探鳥会」に、お世話係で協力している。

(2) JAWAN、JEAN

- ① JAWAN 総会 2022 年度は新型コロナウイルス感染防止のため開催されなかった。

② JEAN「国際ビーチクリーンアップ」

4月23日、9月24日に参加。

(3) 日本自然保護協会

日本自然保護協会に和白干潟クリーン作戦の年間スケジュールを送りナビに掲載をお願いし、掲載された。

(4) グリーンコープ生協ふくおか福岡東支部

第34回和白干潟まつりで共催して頂いた。

第2回干潟まつり実行員会では福岡東支部眞名子支部長が参加した。

(5) 福岡市ボランティア交流センター「あすみん」

HPなどへの情報提供を継続し、ボランティアに登録した学生などがクリーン作戦に参加している。

(6) 蒲生を守る会とは 機関紙交流を続けている。

(7) 本年度から「生物多様性のための30by30アライアンス」に登録した。7月に日本自然保護協会の「身近にあるOECM潜在候補地」についてのアンケートに書き込み送付した。

16. 「和白干潟を守る会」の運営に関して

(1) 定例会議・総会

原則毎月第4土曜日に守る会の事務所で「定例会議」を開催。2月は「総会」を開催し、同日に臨時定例会議を開催した。総会で1年間の活動のまとめ、会計報告、新年度活動方針、予算等を決めた。2019年の総会で定めた内規「会の独立性・中立性について」、「資金の調達について」の確認を行った。

定例会議では会の活動に関する報告、予定を共有し、重要な事項は全員で意見交換して決定した。

コロナ禍であっても、一度も中止すること無く開催することが出来た。但し、感染対策としてマスクの着用、入り口での手指の消毒、間隔を開けて座る、歌は歌わない、窓を開けての換気などは継続している。今年度も新規会員が増え定例会議に参加する顔ぶれが変わった。定例会議出席者は平均約13名だった。

(2) 事務局体制と役割分担

会鳥には「ミヤコドリ」が就き、続いて代表、役員、各イベントのまとめ役等の事務局体制となっている。会の活動にあたって、定例会議に出席している事務局メンバーはできるだけ様々な活動を分担することで、負担が偏らないようにしている。但し、平日の活動が多いため、若い人の参加が難しくメンバーの固定化が目立っている。しかしながら高齢化に伴う後継者の問題は改善の兆しが感じられる。

(3) 助成

・イオン環境財団から助成金を受けた。

(4) 寄付

① あいおいニッセイ同和損保KKより寄付いただいた。

② MS&ADインシュアランスグループホールディングス(株)より寄付いただいた。

③ イオン九州(株)より「幸せの黄色いレシートキャンペーン」でイオンギフトカードを寄付いただいた。

④ 和白東レインボークラブ連合会より寄付いただいた

⑤ 香住ヶ丘5丁目2区6組の方々から寄付いただいた。

⑥ 会員や市民からカンパをいただいた。

(5) 応募と受賞

・環境に関する賞にはこれまで色々と応募してきたが、今年度は守る会の活動に適した賞が無かったので、応募は行わなかった。

- ・8月 国土交通省九州地方整備局（福岡市港湾空港局）から「緑綬褒章受章」についての問い合わせがあり、「受章の意思がある」と伝えた。

(6) 2022 年度末の新規会員

個人：5名

(7) 2022 年度末会員数（新規会員含む）

個人会員：199名 団体会員：12団体

17. パンフレット類の在庫（2023年1月現在）

- ・和白干潟を守る会リーフレット 3,804
- ・和白干潟の自然案内（和文） 1,700
- ・環境教育シリーズⅠ（環境教育プログラム） 6,328
- ・環境教育シリーズⅡ（水鳥,底生生物,植物図鑑） 843（※次年度印刷予定）
- ・和白干潟観察マップ・年間スケジュール表 毎年印刷
- *和白干潟を守る会封筒 9,900
- ・ラムサール条約と和白干潟 300
- ・未来につなごう和白干潟～和白干潟を守る会 20年のあゆみ 10
- ・未来につなごう和白干潟～和白干潟を守る会 30年の歩み 1,227
- ・四季の和白干潟の自然Ⅰ 3,090
- ・四季の和白干潟の自然Ⅱ 8,932
- ・和白干潟の自然案内（英文） 496
- ・環境教育シリーズⅡ（英文） 376
- ・環境教育シリーズⅡ（韓文） 25

18. その他

- ・海ノ中道海浜公園委託の鳥類調査に協力（毎月1回） 2名